

啄木ゆかりのカルタ祭

本行寺の門信徒会報

— また道・ゆく道 —

第86号

2026年1月1日



ホームページ

本行寺門信徒会 銚路市弥生2丁目 TEL 41-5329
<https://hongyouji946.com/>
 E-mail hongyouji@poppy.ocn.ne.jp



案に五十年前の
羅西亞の青年よりも
多く知れり。

明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

卷頭の写真は昨年11月23日に行われた本堂・旧納骨堂国指定有形文化財登録記念事業の中で演じられた詩劇「啄木アンソロジー in Kushiyoの夜」の一場面でございます。

啄木の詩（17作品）の朗読とひとり芝居で啄木の生涯を再現した詩劇で釧路演劇協議会顧問の星光二さんが作・構成・演出をして下さいました。私も劇の中で岡西と一緒に出演させていただけました。始まる直前は私も岡西も大変緊張しておりましたが、上演が始まると啄木の生きた明治にタイムスリップしたような不思議な感覚となり啄木の詩が私の心にすっと入ってきました。啄木の詩の素晴らしさをあらためて感じました。啄木の詩の素晴らしさをあらためて感じさせられるひとときとなりました。

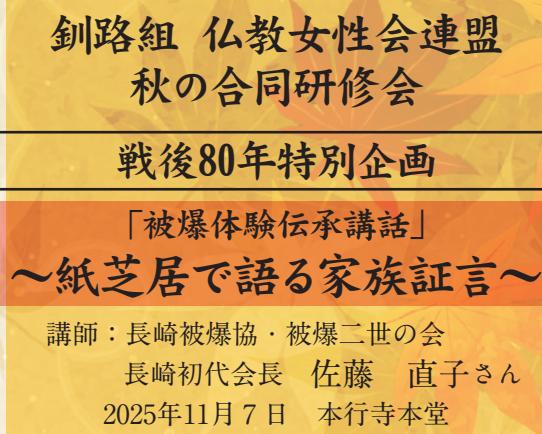
さて、今回の催しには200名を超える皆さまにご来場をいただき文化財登録への関心の高さがうかがえました。この事業は啄木研究家の北畠立朴先生はじめ釧路文学団体協議会、釧路演劇協議会、元町青年団など多くの釧路市民有志の皆様が企画立案と当日の運営にいたるまで担当をして下さいました。お手伝いして下さった皆様は口を揃えて今回の文化財登録を「嬉しい」「釧路の宝」「釧路の誇り」と仰つて下さ



本行寺 住職 顯史
菅原

いました。本当に有難いことです。

これからは「コミュニティセンター」としてのお寺」という存在が求められる時代になっていくのではないかと考えております。その先駆けとして本行寺では宗派を超えて開催している「元町おてら食堂」、すべての子どもを対象とした「キッズサンガ子どもの集い」、誰でも参加できる「恋活IN本行寺」など地域社会に貢献、そして還元するイベントを開催して参りました。これからは釧路の寺社仏閣では唯一無二の文化財という特性をフルに生かしながら地域の皆様に貢献で参ります。



新年のごあいさつ



本行寺門信徒会
会長 顯治
種市

よろしくお願ひ申し上げます。
昨年は、本行寺にとつては記念すべき一年でした。本堂、旧納骨堂が国の有形文化財登録されたこと、前庭用地を樹木葬庭園「花楽苑」として開園したこと、この二つがあげられることと思います。

さらに、記念事業として、地域の元町青年団、元町フットバス広め隊を中心とした実行委員会主催のイベント（詳細は別記）の実施等がありました。記念講演、新春を迎えたこととお慶び申し上げます。昨年は会の運営にご協力ご支援をいただき厚くお礼申し上げます。本年もただいた地域の皆様には感謝申し上げる

お寺は、先祖の御靈にお詣りすることだけではありません。常例法座や研修会、教化団体の集会等を通じて「学びあり語りあり」ながら「つながりを深めあう場」です。ご門徒の皆さん進んでそれらの集いに参加しましょう！
「南無阿弥陀仏」を唱えながら仲間との絆をつよめましょう！
合掌

皆さん、こんにちは。本行寺坊守、菅原麻子です。新年あけましておめでとうございます。

二〇二五年は、戦後八〇年目の年でした。この節目を迎えまして、戦争の悲惨さや平和や命の尊さについて考え、戦争の記憶を決して忘れないために、去る二〇二五年十一月七日に釧路組佛教女性会と総代部が合同で研修会を開催しました。

当日は六十名以上の方のご参加がありました。ご講師として長崎より被爆二世の佐藤直子さんをお招きしました。直子さんの父池田早苗さんが十二歳の時買い出しに行く途中、爆心地から2 kmの長崎市小江原町で被爆したそうです。爆心地から800 mの自宅に残っていたときようだい五人は原爆投下から十日間で全員亡くなり、その後ご両親も原爆症で死亡。この被爆体験の語り部を三十年以上続けてきたお父様でしたが、二〇一九年五月十六日に八十六歳で他界。その後、この体験を

次世代にも語り継ぐため、直子さんが活動に尽力されているそうです。
教科書やTVで見聞きするのと違いい、生の体験を聞くのは初めてだったのです。心に響くものがありました。
本当の戦場の姿を知らなかつた私だと気づかされました。今この瞬間に生き、世界各ででは武力衝突や紛争が絶えません。私達淨土真宗門徒は、決して当たり前じゃない『おかげさま』の命を生かさせてもらっていると知っています。この命の尊さや、平和のほんとうの大切さを日々お念佛を申しながら子や孫にと紡いでいきましょう。

ところであります。

私たち門信徒としても喜ばしい年であつたといつても過言ではないと思います。これからは、更なる発展と、護持にはげまなければならないと思うことあります。

宗祖 報恩講法要 二〇二五年十月十六日

院代 相撲 浩心

昨年も新型コロナウイルス以来続い
ております日程で、院内だけでのお勤
めでした。

法要はご満座法要と永代経法要を併
せて一座法要の報恩講法要となりまし
た。

御講師の先生は十勝清水町の壽光寺
住職増山直樹氏をお迎えしました。壽
光寺は、本行寺のご門徒で書道家であ
り淨土真宗本願寺派の僧侶でもありま
した、亡き石原行雄先生の奥様石原昱
枝さん

皆さんよく知っているお話しではあります
が、迫真的語り口に
亡くなりになつた後、月忌参りに伺う
と、婦人会に入つていらない方々が「本
当にやさしい方でとても残念」という
山本妙子さんのお人柄を偲ぶ声が多く
あります。追思の語り口に
すっかり引き込まれてしましました。

本堂という場所でもあり、どんな人間でもお救い下さるうとす
るお釈迦様のお慈悲を、お話の中で感じた事が出来ました。



おかげさまの心

広報部 山本 悅也

ありました。私も何度か地方の研修会
など車で移動中いろいろなお話をさせて
いただいたのを思い出します。
生者必滅（生きているものは必ず死
ぬこと）会者定離（出会った人とは必ず
別れること）愛別離苦（愛しき人と
必ず別れなければならぬ苦しみ）

今年お参りに来られた方も、来られ
なかつた方も、来年の報恩講には是非
お参りくださいますようお願い申し上
げます。



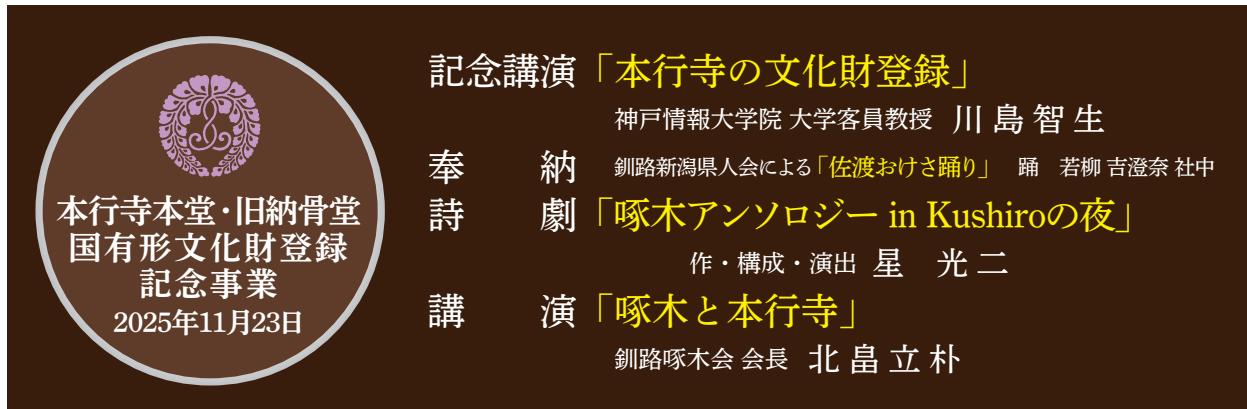
* 報恩講記念公演 *

ひとり語り「蜘蛛の糸」

語り/植田 研一 築笛/山口 千那

（写真）

記念事業



令和七年十一月二十三日に記念事業実行委員会の主催によって行われた内容を紹介します。この事業は、記念講演・奉納・詩劇・講演の部門で実施されました。

記念講演は 神戸情報大学院の川島智生客員教授が、近代建築史を専門に寺文化財指定や登録を担つている立場から、本行寺の建築について調査することになりました。

この度は、文化財登録に至った経緯から始まり、本堂の特徴は、和風を基調とした和洋折衷建築であり、防火対策として「札幌軟石」を使つてること、本堂の屋根裏調査で見つけた「棟札」から新潟県間瀬大工と呼ばれた職人による、高い技術が駆使された工法による構造であるこ



「本行寺の文化財登録」川島智生教授

奉納は、本行寺の建築に当たつた大工の皆さまが新潟県西蒲原郡間瀬村出身「間瀬大工」と呼ばれた大工集団であつたことから、出身地にちなんで釧路新潟県人会により、「吉澄奈社中の皆様による「民謡 佐渡おけさ踊り」でした。普段は、触れることが少ないので、この機会に恵まれました。

と、特に、本堂玄関ひさし部分の木鼻装飾が木彫ではなく、モルタルを使つた珍しい彫刻であること等々が登録文化財として価値あること、道内ではごく希少な価値のある建築物であると語られていました。



「佐渡おけさ踊り」若柳吉澄奈社中

苦悩の生活を表現した詩劇でした。構成演出をされた作者の星光二氏が進行と解説を担当し、学生演劇集団の野々山実月さんが啄木役で出演。劇中、和歌の唱和役として菅原住職と岡西法務員が出演されました。

明治十九年に生まれてから志を持つて上京し、困窮した生活から病に伏して生家につれ戻り十六歳で啄木を号した。



「暁木アンソロジー in Kushiroの夜」

た。イベントの締めは、啄木研究者で本行寺啄木資料館館長北畠立朴さんの「啄木と本行寺」をテーマに啄木の釧路での暮らしぶりを語られました。

釧路での暮らしの中で酒を親しみ、芸者「小奴」と親しくしたほかに柳川という女性と交友関係にありましたこと、どちらかと言うと「柳川と

再度心に決め、上京し朝日新聞社に籍を置くが、肺結核を患い人生に終わりを告げた。

啄木明治四十四年作の「呼子と口笛より」「飛行機」の詩が劇の始まりと終末にながれていきました。

出演者の熱演と内容の濃い詩劇に参観者の皆さんは感動していました。



いう女性が本命である。」と語られたことは今まで耳にしたことがないことでした。

啄木は宴会後しばしば行われていた「本行寺」の「歌留多会」に出向いたことから本行寺との関わりがうまれたそうです。

女性関係と借金の多い釧路での生活であつたと結ばれました。

女性関係と借金の多い釧路での生活であつたと結ばれました。

女性関係と借金の多い釧路での生活であつたと結ばれました。



「啄木と本行寺」 北畠立朴会長

記
門信徒会長 種市

このイベントを通してご尽力をいたいた地域の皆さまと関係機関団体、ご後援いただいた皆さまに感謝とお礼を申し上げ、イベントの報告とさせていただきます。



● 門徒僧侶合同研修会 ●

◆ 日時 令和8年2月4日（水）午後1時から午後2時半頃まで（受付午後1時 開会式午後1時15分）

◆ 場所 本願寺（釧路市弥生2-11-22）

◆ 講師 本願寺派輔教・行信校前校長・常見寺住職利井唯明先生

◆ 受講料 無料（どなたでも参加出来ます）

法味一言

飛行機
「見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。

給仕づとめの少年が
たまに非番の日曜日、

肺病やみの母親とたつた
二人の家にて、

ひとりせつせとりイダアの
独学をする眼の疲れ……
見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。」

石川啄木詩集

「呼子と口笛」より

●門徒僧侶合同研修会●

（仏教壮年会研修会併修）
お聖教を学ぶ 公開講座

◆ 「大経のこころ」

◆ 日時 令和8年2月4日（水）午後1時から午後2時半頃まで

◆ 場所 本願寺（釧路市弥生2-11-22）

◆ 講師 本願寺派輔教・行信校前校長・常見寺住職利井唯明先生

◆ 受講料 無料（どなたでも参加出来ます）

寺子屋 子どもの集い

子どもの集い担当

岡西 慶照

令和七年七月三十、三十一日に本行寺において、寺子屋子ども集いが開催されました。今年は昨年よりも多く、五十五名の子供さんに参加してもらいました。

コロナが明けてから、年々参加人数が増えており、たくさんの子供さんに参加してもらえる事が、スタッフとしましてもとても嬉しいです。

また、昨年に引き続き、今年も九州の「遊びの研究所」より中島 宏先生をお招きし、先生にはゲームを担当していただきました。

特別な物を用意しなくとも、身近にあるもので面白いゲームができるという事を、子供さん同様に、スタッフも実感しました。

チーム対抗で体を動かすゲームや、頭を使うゲームなど、汗をかきながら楽しむ子供さんの姿を見る事ができ、開催できてよかったです。

他にもバーベキューやりきもだめし、花火など、二日間通して楽しんでもらえたのではないかと思います。

また、楽しみの中にもほとけさまの教えに触れてもらえたことも、大きな成果であり、これからも継続していきたいと感じております。

今後もこのようなご縁はもちろん、青年層の方々にも気軽にお寺に足を運ん

でもらえるようなご縁づくりに、青年会一同、取り組んでいきたいと思いま



焼き肉やカレーもすくおいしくて、すごくお寺にとまれたことに感謝しています。とくにおもしろかったのは、きも試しています。とてもピックリして、わらって一番お寺の中で楽しかったです。

● 小学五年 長岡 舞 衣

初めて、寺子屋に来て思つた事と分かった事は、まず、スタッフのみなさんがやさしい、またはおもしろい事です。

二つ目は、お寺できもだめしをやると

本当にゆうれいが出そうで、ものすごくわい事です。

最後の三つ目は、みんな年関係なく友達になれる事がいいな、と思いました。

タコはんも朝はんもどっちもおなじくらいおいしくて、どちらもいえにまけないくらいでした。♥☆

うな二日間でした。

● 小学五年 佐藤 湊 斗

ぼくが一番楽しかったことは、休み時間にやつたバスケットボールです。

理由は、友達やいろいろな人とやれるか

らです。あと、きのうの花火を見たことで

思いました。

● 小学三年 すがわらりょうけん

さいしょは、みんなとねるのがこわかつたけど、みんなと、いっしょにねれてよかつた。友だちは、さいしょは、すくないと思つたけど、みんなと友だちになれたし、友だちもいて、ようちえんのお友だちとあえたし、小学校の友だちもいてよかつたよ。

理由は、いろいろな大きさの花火を見れ

ます。らい年もさらい年もこれるときは、き

ます。

● 小学二年 加賀谷 翼 朱

さいしょは、みんなとねるのがこわかつたけど、みんなと、いっしょにねれてよかつた。友だちは、さいしょは、すくないと思つたけど、みんなと友だちになれたし、友だちもいて、ようちえんのお友だちとあえたし、小学校の友だちもいてよかつたよ。

理由は、いろいろな大きさの花火を見れます。らい年もさらい年もこれるときは、き

ます。



年前の写真の
曾祖父母、祖父、
父、祖父の兄
も本行寺の納
骨堂に安らか
に眠っています。
(山本悦也)

数年前、本家の叔母が亡くなつたとき、仏壇から曾祖父の家族全員（五男一女）の集合写真が出てきた。そこには、「大正九年度、国勢調査記念 山本家、砥の川・本家全員デス」と各自の名前と年齢が書かれていた。

大正九（一九二〇）年は、第一回国勢調査が大規模に行われた年である。

今も同じ西暦が五の倍数の年の十月一日に実施された。みんな着物を着ている。曾祖父五十三歳、曾祖母四十七歳。次男の祖父は二十二歳で羽織・袴をきちんと身につけている。十一歳の末っ子は袴に絆の着物を着て、下駄を履き、制帽をかぶっている。紅一点の二十歳の長女は日本髪を結っている。

曾祖父一家は明治三十八（一九〇五）年、日露戦争が終わった年に徳島県から余市郡仁木町砥の川に入植し、果樹園をやつていたようだ。以前、父の代（三代目）のいとこ会で徳島に「先祖供養の塔」を建てたおり、お参りに行つてきました。自分も代々続く「命のバトン」を受け継いできたことを実感した。

理由は、いろいろな大きさの花火を見

ます。あと、きのうの花火を見たんだな

ども、ビックリして、わらって一番お寺の

中で楽しかったです。

今日はこの百

年ぶりの写真の

曾祖父母、祖父

も本行寺の納

骨堂に安らか

に眠っています。